

一般社団法人日本森林学会 2020年度(令和2年度)事業報告

(事業期間：2020年3月～2021年2月)

(1) 第131回日本森林学会大会の開催

新型コロナウイルスの感染拡大により、会場での開催を行わなかった。「第131回日本森林学会学術講演集」を発行し、要旨が掲載されている研究発表を、すべて第131回大会で発表されたものとした。研究発表は総計811件で、内訳は部門別口頭発表210件、部門別ポスター発表436件、公募セッション及び企画シンポジウム口頭発表130件、公募セッションポスター発表35件であった。高校生ポスター発表を併催し、31件の発表があった。

(2) 第132回日本森林学会大会の準備

日本木材学会との合同大会として、新型コロナウイルスの感染拡大への対応のためオンラインでの開催を準備した(2020年3月19日～23日、ただし22日は除く。大会運営委員長：土屋俊幸会員、東京農工大学)。2020年5月7日にオンライン会議において大会運営委員会引継会議を開催した。公募セッションと企画シンポジウムを会員から公募し、公募セッション5件、企画シンポジウム11件を採択、14の部門別口頭・ポスター発表とともにウェブ登録システムによって研究発表申込を受け付けた。第8回高校生ポスター発表を企画し、全国の高校からの発表申込を受け付けた。公開シンポジウム「シン時代の森林・木材を考える」を企画した。学会企画として「二学会におけるダイバーシティ推進の取り組みとこれから～With コロナ禍時代の学会に求められること～」 「聞いてみたい！女性研究者によるフィールドワーク&ライブイベント」 「帰国留学生会員および海外林学会とのネットワークフォーラム(Online Reunion of Ex-Overseas Student Members and International Networking Forum among Forest Societies in Asia)」 「森林科学を学んだらどんな仕事があるのか？」 「高校生ポスター表彰式とパネルディスカッション『大学で森林を学ぶ』」の準備を進めた。以上を含めて大会プログラムの編成を行い、「第132回日本森林学会学術講演集」を編集した。

(3) 第133回日本森林学会大会の準備

東北森林学会の推薦に基づき、大会運営委員長(林田光祐会員、山形大学)を委嘱し、大会運営委員会を組織した。

(4) 第134回日本森林学会大会の準備

開催地区を関西地区とし、応用森林学会に大会開催機関の推薦を依頼した。

(5) 「日本森林学会誌」の発行

2020年4月(第102巻第2号)、6月(同3号)、8月(同4号)、10月(同5号)、12月(同6号)及び2021年2月(第103巻第1号)の年6回発行し、科学技術振興機構のJ-STAGEで公開した。論文24編、短報15編、総説2編、その他(巻頭言)5編及び学会記事を掲載し、総計442ページとなった。ページ数は昨年度に比べて約100%増であった。JSTの提供するデータリポジトリサービスJ-STAGE Dataのパイロット運用に協力した。第103巻第1号より、表紙写真を変更した。

(6) 「Journal of Forest Research」の発行

2020年4月 (Vol. 25 No. 2), 6月 (No. 3), 8月 (No. 4), 10月 (No. 5), 12月 (No. 6) 及び2021年2月 (Vol. 26 No. 1) の年6回発行した。特集“Long-term monitoring and research in Asian university forests: towards further understanding of environmental changes and ecosystem response”をVol.25No.3及び4に分割掲載した。掲載原稿数はInvited Review 1編, Original Article 47編, Short Communication 15編, Preface 2編, 総ページ数は496ページで, 昨年度より109ページの増加となる。電子版の周知を図るため, メールマガジンを用いて会員に発行を知らせるとともに, 日林誌と学会ウェブサイトで発表論文の日本語書誌情報を掲載した。2019年のImpact Factorは1.065で, 前年度の0.777より上昇した。

(7) 「森林科学」の発行

2020年6月号(89号), 10月号(90号), 2021年2月(91号)の年3回発行した。特集「バラ科樹木の脅威 クビアカツヤカミキリ」「車両系林業機械が森林に与える影響を解明する」「原発事故から10年－森林の放射能汚染をのりこえる－」をはじめ, シリーズ「現場の要請を受けての研究」「林業遺産紀行」「森をはかる」「うごく森」「森めぐり」など, 総計146ページを掲載した。90号(2020年10月)より, 表紙デザイン変更, 全編フルカラー化, シリーズ再編のリニューアルをした。

(8) 「日本森林学会メールマガジン」の発行

第118号(2020年3月)～第131号(2021年2月)を発行した。

(9) ウェブサイトの更新

ウェブサイト更新を随時行い, 最新情報を掲載した。大会や表彰をはじめとする各種の学会情報を会員等に発信するとともに, 学会刊行物などの学会活動について随時発信・広報した。大会発表申し込み及び発表要旨集のオンライン入稿を支援した。その他, 研究集会・シンポジウムや公募等の関連情報を提供・広報した。ウェブサイト掲載情報を整理し, 利便性を高めた。また, ウェブサイトの更新から10年が経過したことから, リニューアルを検討した。

(10) 公開シンポジウムの開催

2020年5月27日に公開シンポジウムを主催予定であったが, 新型コロナウイルスの感染拡大への対応として中止とした。

(11) 日本森林学会各賞の選考及び日本農学賞等への学会推薦

日本森林学会賞は, 伊藤哲会員(宮崎大学)の「生態系サービスを考慮した人工林の配置論と施業論」, 大橋瑞江会員(兵庫県立大学)の「樹木根系の持つ炭素の貯留能とその動態に関する研究」に, 日本森林学会奨励賞は後藤栄治会員(九州大学)の「Chloroplast accumulation response enhances leaf photosynthesis and plant biomass production」, 久野真純会員(東京大学)の「Species-rich boreal forests grew more and suffered less mortality than species-poor forests under the environmental change of the past half-century」に, 日本森林学会学生奨励賞は中山理智会員(京都大学)の「Does conversion from natural forest to plantation affect fungal and bacterial biodiversity, community structure, and co-occurrence networks in the organic horizon and mineral soil?」, 執行

宣彦会員（投稿時：東京大学，応募時：森林総合研究所）の「Plant functional diversity and soil properties control elevational diversity gradients of soil bacteria」に，日本森林学会功績賞は大石康彦会員（森林総合研究所）の「森林教育の研究」に授与することを決定した。また，Journal of Forest Research 論文賞は，JFR 論文賞選考委員会が選考し，理事会で審議した結果，同誌 25 巻 2 号に掲載の Takashi Masaki, Shin Abe, Shoji Naoe, Shinsuke Koike, Ami Nakajima, Yui Nemoto and Koji Yamazaki 「Horizontal and elevational patterns of masting across multiple species in a steep montane landscape from the perspective of forest mammal management」に，日本森林学会誌論文賞は，日林誌論文賞選考委員会が選考し，理事会で審議した結果，102 巻 1 号に掲載の山本伸幸「日本における森林計画制度の起源」，102 巻 1 号に掲載の山田亮・白岡千帆里・能條歩「福島県在住の小中学生を対象とした森林体験を伴う自然体験活動が生きる力と自然との共生観に及ぼす効果」に決定した。第 131 回日本森林学会大会学生ポスター賞は，新型コロナウイルスの感染拡大により第 131 回大会が中止となったため，選考を行わなかった。また，日本学術振興会賞，日本学術振興会育志賞，日本農学進歩賞，日本農学会賞について，会員からの推薦を受け付け，日本学術振興会育志賞に関して本学会推薦業績を決定した。

(12) ダイバーシティ推進の取り組み

2020 年 5 月，8 月，12 月に男女共同参画学協会連絡会の運営会に参加し，議題を話し合った。131 回大会(2020 年 3 月 27 日)に本学会の取り組み報告をはじめ，生態学会，木材学会，産業界，大学，森林総研，地方林試等からダイバーシティ推進関係者と話し合うセッションを開催予定であったが，新型コロナウイルス感染症拡大の防止のため大会自体が中止になった。2020 年 5 月の総会でダイバーシティ推進委員会が常置委員会となった。森林科学 89 号（2020 年 6 月発刊）に第 130 回日本森林学会大会で開催した学会企画のワークショップの報告が掲載された。第 18 回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムが 2020 年 10 月 17 日にオンラインで開催され，ポスター発表を行った。また，シンポジウム前日（16 日）に若手女性研究者に関するワークショップが開催され，委員会から女性 2 名が参加した。第 132 回日本森林学会大会に向けて，関連学会等の託児等の利用や費用補助等の調査を行った。大会では学会企画（2021 年 3 月 24 日）として，木材学会とダイバーシティ推進に関する合同セッション，および女性会員を対象としたワークショップを男女共同参画学協会連絡会の後援を得て，開催する予定である。年間を通し，ウェブサイトとメールマガジン等による広報活動を行った。

(13) 林業遺産の選定

新たに林業遺産 No.36「湯野風穴種子貯蔵施設遺構」,No.37「大日本山林会 林業文献センターと収集資料群」, No.38「平蔵沢ヒバ人工林施業展示林」, No.39「米沢市の山との暮らしを伝える遺産群：草木塔群と木流し」, No.40「再度山の植林と関連資料」, No.41「大型木製水車駆動帯鋸製材装置一式」の 6 件を新規に認定し，2019 年度定時総会で発表した。会員を通じて 2020 年度林業遺産候補の推薦を募り，林業遺産選定委員会において審議を進めた。林業遺産選定事業には林野庁の後援協力を得て，林業遺産選定事業の普及に努めた。登録地域間の交流方法についての検討は次年度に行うこととした。

(14) JABEE（日本技術者教育認定機構）への協力

JAFEE（森林・自然環境技術教育研究センター）の基幹的な学会として、JABEE や JAFEE の活動・運営に協力し、関連学協会との連携を図り、森林分野の技術者教育の向上を進め、日本森林学会大会企画において CPD（技術者継続教育）事業の推進に協力した。

（15） 関連学協会への協力と社会連携の推進

協力学術研究団体として日本学術会議に協力した。第 25 期日本学術会議新規会員の任命拒否に関して理事会から声明を公表した。日本農学会の運営に協力し、運営委員を派遣した。ウッドデザイン賞サポート連絡会に参加協力し、防災学術連携体に参加した。日本流体力学会年会 2020、第 16 回バイオマス科学会議（日本エネルギー学会）をそれぞれ協賛した。第 22 回日本水大賞（日本水大賞委員会・国土交通省）、グローバル森林新時代－森林減少ゼロ・SDGs・循環型社会を目指して－（「森林・林業・山村問題を考える」シンポジウム実行委員会）、第 19 回木材工学研究発表会（土木学会）、令和 2 年度 森林総合研究所公開講演会「きのこを知る－微生物研究の最前線」、ウェブセミナー「ポストコロナの社会と森林」（森林研究・整備機構）、もくネットちば木製品展示会（千葉県木材利用ネットワーク）をそれぞれ後援した。科研費「研究成果公開促進費」への発案を会員に募集したが、応募の申し出がなかった。

（16） 連携学会（旧支部）との連携

オンライン開催となった各連携学会（北方森林学会、関東森林学会、中部森林学会、応用森林学会、九州森林学会）の大会を共催し、会長の挨拶状を送付した。2020 年 12 月に第 475 回理事会と併せて連携学会長会議を開催し、各連携学会の活動状況と課題を共有した。

（17） 日本木材学会との連携

「日本森林学会と日本木材学会との交流に関する覚書」に基づき、相互に理事を派遣した。第 132 回日本森林学会大会を日本木材学会との合同大会として開催の準備を進めた。

（18） 国際学術交流の推進

東アジア（韓国、中国）をはじめとする諸外国との国際的学術交流を進めた。第 132 回大会運営委員会と協力し、大会のオンラインポスターセッションで、韓国および中国林学会からの広報ポスターを掲載した。学会ウェブサイトの英語ページをアップデートするとともに、第 132 回大会のお知らせの重要事項を英訳し公開した。また大会時に帰国留学生会員とのネットワーク形成を目的としたオンラインミーティングを開催する。

（19） 国内研究機関連携の推進

全国林業試験研究機関協議会主催のセミナー「R を用いたデータ解析」「論文の書き方」を共催し、講師の派遣を行った。受講者のアンケートにより、セミナーを総括し、次回以降のテーマ案を集約した。

（20） 中等教育との連携

第 131 回日本森林学会大会は中止となったが、例年発行している「高校生ポスター発表ポスター集」の発行をもって発表に代え、第 7 回高校生ポスター発表の表彰を行った。発表件数は 44 件、参加校数は 34 校・1 グループで、その中から最優秀賞 2 件、優秀賞 3 件及び特別賞 3 件を表彰した。発表ポスターと森林・林業を学べる大学・大学校紹介を掲載した「高校生ポスター発表ポス

ター集」を印刷し、記念品とともに発表校へ郵送した。ポスター発表の概要と講評を森林科学 89 号に掲載した。第 132 回大会における第 8 回高校生ポスター発表の準備を進めた。

(21) 学会運営の改善

Web 会議を用いた理事会開催，電子メールを活用した役員間や各委員間の連絡や代議員や会員へのお知らせにより，会議費と通信費を節減するとともに，意思決定や情報提供の迅速化に努めた。計 11 回の理事会のうち 7 回はメール理事会によった。将来検討委員会を設置し，学会運営と学術大会運営の改善方針を検討した。

(22) 代議員及び理事・監事候補の選出

2020 年定時総会において理事及び監事を選任した。

(23) 一般社団法人としての対応

改選に伴い，理事及び監事を修正登記した。

(24) 会員数の動向

最近4年間

	2018/3/1	2019/3/1	2020/3/1	2021/3/1	前期との差
正会員	2,383	2,377	2,287	2,224	△ 63
国内一般会員	1,839	1,875	1,795	1,782	△ 13
a)日林誌のみ	1,283	1,313	1,252	1,246	
b)+JFR	85	94	95	96	
c)+森林科学	218	220	201	201	
d)+両誌	253	248	247	239	
国内学生会員	533	492	486	438	△ 48
a)日林誌のみ	485	444	429	384	
b)+JFR	13	13	17	12	
c)+森林科学	13	10	19	20	
d)+両誌	22	25	21	22	
海外在住一般会員	6	4	4	4	0
a)日林誌のみ	4	3	3	3	
b)+JFR	1	0	0	0	
c)+森林科学	0	0	0	0	
d)+両誌	1	1	1	1	
海外在住学生会員	6	6	2	0	△ 2
a)日林誌のみ	2	2	2	0	
b)+JFR	4	4	0	0	
c)+森林科学	0	0	0	0	
d)+両誌	0	0	0	0	
機関会員	110	110	106	106	0
国内機関	108	109	105	105	
海外機関	2	1	1	1	
賛助会員	38	38	40	38	△ 2
合計	2,531	2,525	2,433	2,368	△ 65
準会員	226	223	211	201	△ 10

2005年からの推移（各年3月1日時点の会員数）

